

# 序 文

ここに上梓する『20世紀中国の社会システム』は、2007年4月に誕生した京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター（2007年3月以前は人文科学研究所東方学研究部）における事業の一環として進められた「20世紀中国の社会システム」共同研究班の研究成果報告論文集である。2003年4月に5ヵ年の計画でスタートした本共同研究班は、隔週金曜日午後2-5時の3時間を定例の研究会にあてるとともに、海外の研究者が来訪された際には適宜、臨時の研究会を開いて運営してきた。定例と臨時を合せれば優に80回を超える研究会で報告、討議された研究成果の一部が、言わばエッセンスとして本論文集に結晶したのである。

人文科学研究所における中国近代史の共同研究班は、1966年に発足した「辛亥革命の研究」以来、「五四運動の研究」「民国初期の文化と社会」「中国国民革命の研究」「1920年代の中国」と、近代史上の画期となる出来事をテーマに取り上げ、その前後10年ほどの時期を多角的、集中的に研究するという方式で運営されてきたが、四半世紀余りを経た1993年に至り、このような時代横断的な方式の共同研究班をひとまず終え、それ以降、近代史全般にかかわる幅広いテーマを多様な分野の専門家が共同で研究する広領域型の研究班（ジェネラル班）と相当に絞り込んだテーマを深く掘り下げて研究する一点集中型の研究班（スペシャル班）との二本立てで運営することになった。

一点集中型の研究班は、狭間直樹教授が主宰された「梁啓超の研究—その日本を媒介とした西洋近代認識について」（1993年4月-1997年3月）、「中国共産主義と日本—思想・運動・戦争」（1997年4月-2001年3月）という二つの班が終了した後、一時中断していたが、2006年4月に石川禎浩助教授が「中国社会主義文化の研究」というテーマで再開され現在に至っている。

一方、広領域型の研究班は、従来の時代横断的なテーマ設定に代えて、中国近代史をロングスパンで縦断的に切開でき、かつ近代の中国社会を通観するだけでなく、さらに前近代あるいは現代との繋がりをも視野にいれながら、21世紀にまでおよぶ中国史全体の流れの中で近代史をとらえなおすことができるようなテーマの設定が望まれた。そのような条件をクリアする最初の試みが、1993年4月-1998年3月の5年計画で進められた「中国近代の都市と農村」であり、第二段が1998年4月-2003年3月のやはり5年計画で進められた「中国近代化の動態構造」であった。幸い、いずれの研究班も多くの若い研究者をふ

くむ関西一円の専門家の熱心な参加をえた結果、レベルの高い論考を多数寄稿いただき、『中国近代の都市と農村』（京都大学人文科学研究所、2001年3月刊）、『中国近代化の動態構造』（京都大学人文科学研究所、2005年3月刊）という二冊の研究成果報告論文集を刊行することができた。

10年をかけて蓄積されてきたこれらの共同研究の成果を継承しながら広領域型の第三段として、「20世紀中国の社会システム」共同研究班は発足した。

周知のように中国の20世紀は、義和団事件における八カ国連合軍の北京占領から辛丑条約締結への過程で幕を開け、世紀もおしつまった最終段階で、まず香港がイギリスから返還され（1997年）、ついで澳門がポルトガルから返還された（1999年）後にその幕を閉じた。激動の100年は、欧米列強および日本の侵略に対する戦いにその前半のほとんどを費やし、後半は半世紀の歳月をかけて漸く領土返還という所期の目的を達成したのである。

こうした対外関係あるいは政権のあり方から見ると、20世紀の中国はたしかに1949年における中華人民共和国の成立をもって二つの時期に画することができる。しかし半面、その基底にある社会生活の諸相に眼を向けると、この年を境に截然と二つの世界に分かれるわけではないことも、また容易に見て取ることができる。20世紀のまるまる100年の間に、中国社会はどう変わり、あるいはどう変わらなかったのかという問題を、政治、経済、社会、文化など多様な側面から解明することをめざして、この共同研究班は組織された。

以上のようなテーマ設定は、関西一円の多くの研究者、とりわけ若手研究者の興味をひき、正規の班員として50名近くの方に参加していただくことになった。スタート時点での班員のお名前、2004年版京都大学人文科学研究所要覧『人文科学研究のフロンティア』175頁（人文科学研究所のホームページ <http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>）にも掲載されている）に一覧がある。また5年間における正規の研究会での題目と報告者については、『東方学報』第76-82冊（2004年3月-2008年3月）の彙報欄に掲載されているのでご覧いただきたい。

この共同研究班はまた、関西における中国近現代史の国際共同研究拠点という機能も併せ持っている。この5年間に招聘外国人学者などの資格で来訪され、ゲストスピーカーとして講演あるいは報告いただいた方々は、王笛（テキサス A&M 大学助教授）、孫英（中国共産党中央党史研究室主任）、ピエール・エチエヌ・ヴィル（コレージュ・ド・フランス教授）、ジェローム・ブルゴン（フランス国立科学研究センター研究員）、王建軍（西北大学応用社会学部教授）、張海鵬（中国社会科学院近代史研究所所長）、馬敏（華中師範大学校長）、梁景和（首都師範大学歴史系教授）、黄富三（中央研究院台湾史研究所研究員）、張灝（香港中国科技大学名誉教授）、王汎森（中央研究院歴史語言研究所所長）、黄興濤（中国人民大学清史研究所副所長）、張玉林（南京大学応用社会学部教授）、胡礼忠（上海外国語大学国際問題研究所所長）、杜維明（ハーバード大学教授）、周奕（香港文匯報元副社長）、

クラウス・ミュルハン（フィンランドトゥルク大学東アジア研究センター長）、陳熙遠（中央研究院歴史語言研究所助理研究員）、金觀濤（香港中文大学当代中国文化研究中心主任）、劉青峰（同中心研究員）、黃克武（中央研究院近代史研究所研究員）、汪暉（清華大学人文社会科学学院教授）、謝寿光（中国社会科学院社会科学文献出版社社長）、楊群（同社総編輯）、章開沅（華中師範大学教授）、王玉璞（中国孫中山研究会秘書長）、劉蘭兮（中国社会科学院經濟研究所教授）、葉坦（同所教授）、趙学軍（同所副教授）、袁為鵬（同所副研究員）、曲曉範（東北師範大学歴史文化学院教授）、劉景嵐（同学院副教授）、周尚文（華東師範大学教授）、張陟遙（揚州大学政治系講師）、章清（復旦大学歴史系主任）、武力（中国社会科学院經濟学研究所現代經濟史室主任）、林剛（同所教授）、徐建青（同所研究員）、封越健（同所研究員）、関曉紅（中山大学歴史学系教授）、ゴーテリンド・ミュラサイニ（ハイデルベルグ大学教授）、牛大勇（北京大学歴史学系主任）の諸先生である。刺激にみちた興味深い講演あるいは海外における最新の研究動向の紹介をしていただいた42名の先生方に心より感謝する。

また林満紅（中央研究院近代史研究所研究員）、楊奎松（北京大学歴史学系教授）、桑兵（中山大学歴史学系教授）の各先生には、外国人研究員（客員教授）として半年の間滞在いただき、中国近現代史の国際共同研究を推進するという重責を担っていただいた。日々フェイスツーフェイスで中国近現代史文献の解釈から資料データの検索・収集にまでわたって懇切な指導をいただいたばかりでなく、毎回共同研究班に出席して、本国の碩学ならではの深い学識に裏打ちされた有意義な助言をたまわった3名の先生方に対し、再度深甚の謝意を表したい。

最後に、21編の論文を収録した本書の編集にあたってご協力を仰いだ方々への謝辞を記して擱筆する。研究班メンバーの蒲豊彦、岩井茂樹、石川禎浩、袁広泉、森紀子の各氏にはそれぞれの専門分野に近い論文の査読をお願いし、小野寺史郎氏には校正の最終チェックを担当していただいた。本書がリライアブルな論文集として些かなりとも学界に裨益するところがあるとすれば、各氏のご協力の賜物にはかならない。また本書の出版には、人間文化研究機構との共同事業「人文学の視角から見た現代中国の深層構造の分析」のプロジェクト経費を使用させていただいた。息のながい人文学の基礎研究への深い理解に基づく同機構のご支援に対し、あらためて厚くお礼申し上げる。

2009年5月4日

現代中国研究センター南窓にて

森 時 彦